

[シンポジウム]

## ジェンダーと会話分析 ——成員カテゴリー化装置としてのジェンダー——

山崎晶子  
山崎敬一

### 1. 序

人間の会話や相互行為から性別カテゴリーを探る研究は、言語学や文学、フェミニズムだけではなく、社会学のエスノメソドロジー (Garfinkel 1967) のなかで育ってきた会話分析においても、中心的なテーマとして盛んに研究がなされている。会話分析のなかでもっとも重要な概念は、サックス・シェグロフ・ジェファーソン (Sacks, Schegloff and Jefferson 1974) による会話の順番取りシステム (turn-taking system) である。会話の順番取りシステムは、一人の人がどれほど話すことができるかを決定する順番構成的成分 (Turn Construction Unit) と、次に誰が話すかを決定する順番移行的成分からなる。

とくに、順番構成成分 (TCU) と、それによって次の話し手が話し出す場所 (順番移行が適切になる場) を互いに予期できるという知見は、その後のエスノメソドロジー研究・会話分析研究・相互行為分析研究を大きく発展させるターニングポイントとなった。

この会話の順番取りシステムにおいて、女性と男性の会話では、男性の方が、順番移行が適切になる場より早く話し始めること、すなわち女性の話の順番に男性がわりこむことを示したドン・ジンマーマンとキャンディス・ウェスト (Zimmerman and West, 1975) の論文は、会話分析を用いて性別カテゴリーとその非対称性を論じた重要な論文となった。

さらに、マルツとボーカーは、より文化主義的に男女のスピーチスタイルの違いに着目して研究を行った (Maltz and Borker 1982)。デボラ・タネンはベストセラーとなった『わかりあえない理由 (わけ)』 (Tannen 1990 = 1992) のなかで、男女のコミュニケーションスタイルと理解の相違は、男性と女性の文化の違いによって生まれると論じている。

また、言語人類学のマージョリー・ハーネス・グッドウィン (Goodwin 1990) は、男の子同士と女の子同士の言い争いを研究し、参与枠組みの問題から性別カテゴリーを論じている。

近年では、フェミニズムの課題を基調とするフェミニスト会話分析のエリザベス・ストコエ (Stokoe 1997) や、“Gender Talk: Feminism, Discourse and Conversation Analysis”

(Spear 2005) を出版したスーザン・スピーアらが、会話とジェンダーの問題を論じている。

本論では、性別カテゴリーとはどのような問題であるかということをも明らかにしたい。さらに、セクシュアル・ハラスメントに関連した会話の分析を通じて、性別カテゴリーと相互行為の関係を明らかにしたい。

## 2. 性別カテゴリーとは何か？

会話と相互行為における性別カテゴリーの問題を考察するにあたって、ハーヴェイ・サックスが“Lectures on Conversation” (Sacks 1995) で論じた成員カテゴリー化の問題を再考することが必要であろう。サックスは、社会の成員が、男性あるいは女性というカテゴリーによってカテゴリー化され、男性あるいは女性として分類されるという問題を成員カテゴリー化の問題と名付けた。

また、サックスは“Lectures on Conversation”の初期の講義において MIR (membership, inference-rich, representative) カテゴリー (Sacks 1995:41) について議論している。サックスが、ここで焦点をおいたのは、ある社会成員がカテゴリー化される場合、1. その成員カテゴリーと関連した知識によってさまざまな推論がその成員に対してなされる、2. その成員はその成員カテゴリーの代表としてカテゴリー化される、ということである。

さらにサックスは、成員カテゴリーがカテゴリーの要素の集合という性格をもつことに着目し、成員カテゴリー化装置という概念を提出した (Sacks 1972)。人々は、[男性、女性] というカテゴリーの集合のなかの「男性」あるいは「女性」というカテゴリーをもちいて、ある社会成員のあつまりをカテゴリー化する。またサックスは、カテゴリーの集合を社会成員の集団にどのように適用するのか (適用規則) という問題を探求した。

サックスがあげた適用規則の一つは、ある社会成員をカテゴリー化する時には、一つのカテゴリーの集合の中に存在する一つのカテゴリーでカテゴリー化することで十分であるということである。

たとえば、ある人間は「国籍」という集合では日本人、「年齢」という集合では若者、「性別」という集合では女性としてカテゴリー化される。しかし、われわれはある人間をカテゴリー化するさいに、ただ女性というカテゴリーを適用するだけでも十分にカテゴリー化することができるのである。サックスは、この適用規則を経済性規則と名付けた (Sacks 1972: 33)。

またサックスは、複数の人間をカテゴリー化する場合には、次のような適用規則が適用されると論じた。サックスは、複数の人間のなかの最初の一人を、あるカテゴリー集合のなかの一つのカテゴリーでカテゴリー化した場合、他の成員も同じカテゴリー、あるいは、同じカテゴリー集合のなかの別のカテゴリーでカテゴリー化される可能性があることを指摘した。

たとえば、学校のクラスで、ある生徒を女性としてカテゴリー化した場合、クラスの他の成員をも男性あるいは女性としてカテゴリー化することが可能になる。サックスはこうしたカテゴリーの使用を一貫性規則と名付けた (Sacks 1972: 34)。

サックスによれば、「成員カテゴリー化装置」とは「カテゴリーの集合+適用規則」で表されるものであった (Sacks 1972: 32)。

MIR や成員カテゴリー化装置によって、ある社会成員は、男性あるいは女性としてカテゴリー化される。さらには、男性あるいは女性の代表としてカテゴリー化される。さらにまた、そのようにカテゴリー化された成員は、男性あるいは女性に関連した知識によってさまざまな推論をされる。

こうしたこと自体が、性差別という問題をひきおこす可能性もある。しかし、こうしたカテゴリーの使用がなければ、私たちは、そもそもある社会成員を分類したり、それぞれの社会成員の数を数えたりすることすらも可能ではなくなる。たとえば、学校で生徒を数える際に、経済規則と一貫性規則の適用がなければ、女子生徒が何人いるかも数えることができないのである。たとえば、ある生徒を女子、そして次の生徒を日本人として分類して行くとすると、女子生徒が学校に何人在籍しているのかということもわからなくなる。

このように成員カテゴリー化装置やその使用は、わたしたちが社会においてものごとを考えるにあたって、もっとも基本的な仕組みを形作っているのである。

では成員カテゴリーのなかで、性別カテゴリーがもつ特徴とはなんだろうか。一つは、成員カテゴリーの集合である性別カテゴリー装置は、どの社会成員でもその性別カテゴリー装置の集合のなかのカテゴリーによってカテゴリー化されることが可能であるということである。たとえば、男性あるいは女性というカテゴリーで、どのような人間の集まりでもカテゴリー化できる。

それにたいして「先生と生徒」という成員カテゴリー装置は学校の教室にいる人を全員カテゴリー化できるが、駅にいる人全員をつねにそのカテゴリーにおいてカテゴリー化することはできない。

サックスは性別カテゴリー装置のもつこうした特徴を Pn 適合的装置と名付けた (Sacks 1972)。Pn 適合的装置とは P = Population (成員の母集団) が、どのような数 (n = number) の母集団であっても適用可能であるという意味である。ただし、Pn 適合的装置は、性別カテゴリー化装置だけではない、たとえば、年齢も Pn 適合的装置である。Pn 適合的装置が少なくとも二つあるということは、どの集まりの中のどの人間も、二つ以上のカテゴリーでカテゴリー化される可能性があるということの意味する。それゆえ、たとえ Pn 適合的装置の性別カテゴリー化装置であっても、それを用いて一義的にある人間をカテゴリー化できるわけではない。

もう一つの性別カテゴリー化装置の特徴は、性別カテゴリー化装置の要素が二つだけであ

るということである (Sacks 1995: 47)。すなわち性別カテゴリーの要素は、「男性」と「女性」の二つである。このことによって、二つの問題がうまれる。

ひとつの問題は、男性と女性が対立的なカテゴリーとして用いられるということである (男性対女性)。もう一つの問題は、「男性と男性ではないもの」、さらに「女性と女性ではないもの」というカテゴリーの集合が、「男性と女性」という集合と同等のものとして用いられる可能性があるということである。そのために、実際には女性であっても、「女勝り」あるいは「女ではない」という形でカテゴリーを用いて、正統的な「女性」というカテゴリーからはずすことができる。それによって、「男性」・「女性」というカテゴリーによって社会成員をカテゴリー化する場合でも、人々は「男性」あるいは「女性」としてそれぞれの成員がカテゴリー化される範囲を変えることができるのである。

このように、Pn 適合的であり、カテゴリー要素が二つであるという特徴が性別カテゴリーの特徴であり、それが性別カテゴリーの会話や相互行為における使用において重要な役割をはたしているのである。

### 3. 会話とジェンダーの問題

会話とジェンダーのかかわりの問題は、ドン・ジンマーマンとキャンディス・ウェスト、またデボラ・タネン、さらには近年のフェミニスト言語学においても論じられている。そこではたとえば、「男性」が「女性」により多く割り込みを行うことや、「女性」の方に支持的会話が多いことなどの問題があげられ論じられている。このような指摘は前節で述べた、性別カテゴリーと会話の問題と同様なものと思われるかもしれない。しかし、サックスが指摘した問題は、たとえ「男性」であってもつねに「男性」としてカテゴリー化されるわけではないということである。それは節頭にあげた会話とジェンダーの議論とは、その性格を異にするのである。

そのために、会話分析の先駆者であり第一人者であるエマニュエル・シュエグロフは、ジンマーマンとウェストの研究を、社会構造的なカテゴリーである「男性」や「女性」というカテゴリーを用いて、会話を一義的に分類して分析しているとして批判を行っている。シュエグロフによれば、会話者がその文脈において、すなわち会話のシークエンスにおいて、実際にどのようにカテゴリー化をしているかという問題をとらえることが重要なのである。

しかし、このシュエグロフの指摘を狭く受け取ると、研究者は会話における性別カテゴリーが実際に使用されている場合のみに限り、しかもその性別カテゴリーが使用されている場面のみを研究することができるということになってしまう。だが、その場合には、成員カテゴリーは会話のなかですでに実際に人々によって用いられてしまっている。そのために、どのようにして成員カテゴリーが使用されるのか、あるいは使用可能となるのかという問題が、深く探求されなくなってしまう可能性がある。

だが、シェグロフの指摘は、会話におけるカテゴリーの現実的な使用に研究を限定使用としたのではなく、会話のシークエンスにおける性別カテゴリーの使用のレリバンス（適切性）について探求をすべきであるということを示唆しているように思われる。シェグロフは次のように述べている。「解決策は…、研究者による特徴づけのレリバンス（適切性）が、その特徴づけられた場にいる参加者にとってレリバント（適切）である証拠を求めるということである」（Schegloff 1987: 218 = 1998: 157）。

われわれは、あるカテゴリーの使用が、実際の会話のシークエンスにおいて一貫的なレリバンスをもっているということを示したいと思う。会話分析において、ひとつの重要な指摘は、ある一つの発話がそれにつづくシークエンスにたいして継起的な含意（sequential implicative）をもっているということである。たとえば、隣接対という会話分析のもっとも重要な概念は、質問は次の発話における応答を適切にするという「継起的な含意」をもつ。われわれは、以下の節である性別カテゴリーの使用が継起的な一貫性を他の会話においてもつということを示したいと思う。

#### 4. 性別カテゴリーと正当な知識の分配

この節では、会話参加者にとって性別カテゴリーの使用がレリバント（適切）になる場面に焦点をあわせてみたい。われわれは、埼玉大学で社会学を履修している学生からボランティアをつのり、事前にセクシュアル・ハラスメントにかんする調査票に答えさせたうえで、その調査にかんする議論を行わせ、その場面をビデオで撮影した。調査の参加者は、記入し終えた調査票を参照しながら、3名から4名の組となって「セクシュアル・ハラスメント」にかんする議論を行った。

下の図1は、断片1の冒頭の部分である。

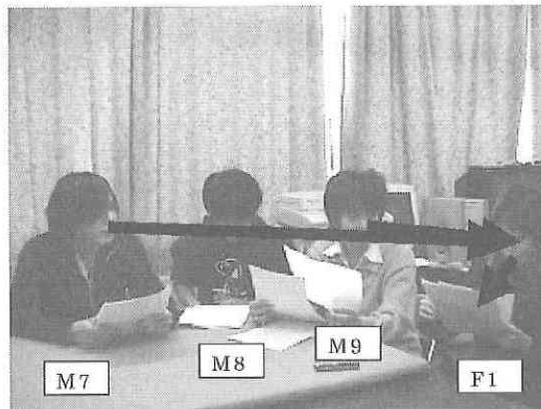


図1（矢印は視線の方向を示す）

断片1

- 1 M7:つけたとこありますか?
- 2 F1: 2、2とか。
- 3 M8: 2?
- 4 M9: 2の2。
- 5 M7: ああ、おなかの。

(トランスクリプトでは男性をM、女性をFとして記述することにする。なお、以下のトランスクリプトで=は、間隙のない発話を、[は同時発話を示す。)

この断片のなかで、M7は調査票の該当するページの項目にマルを「つけたとこありますか?」と質問をする。この調査票の間3は、「あなたは以下のように取り扱われることをセクシュアル・ハラスメントだとおもいますか?セクシュアル・ハラスメントだと思うものの番号に○をつけてください。」という質問である。それにたいして、F1は2行目で「2、2とか」と答える。2-2の項目は「この職場にはおなかの大きな人は似合わない」といわれる。」である。この時、M7とM9は視線と体勢をF1にむけて見ている(図1)。そしてM8は「2?」といって自分の調査票の「2」の場所を探しはじめる。それに対して、M9は「2の2」といって答え、M7は「ああ、おなかの」(5行)といっ、その箇所を見つけ出し納得する。

M7とM9が、F1に視線を向けF1の答えを待っているのは(図1)、セクシュアル・ハラスメントに関して知識をもっているとしてのF1に、M7とM9が志向しているからだと考えられる。さらに、F1の「2、2とか。」という答えに対して、M8、M9、M7が「2?」(3行目)「2の2」(4行目)「ああ、おなかの」(5行目)とそれぞれ確認を行っている。

もちろん、ここではたまたまM7という個人が、F1という個人に質問をしたというだけかもしれない。だが、次の断片2を見てみると、こうした会話や相互行為は、性別カテゴリーに関連して生じているように思われる。

断片2は、断片1の後の場面である。

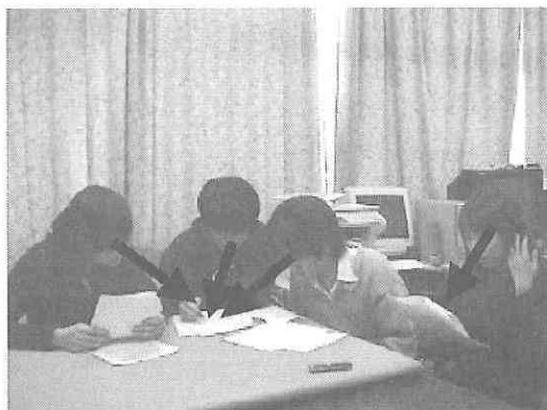


図2

断片2

- 1 F1 : 4 の 15 ってよく、よくなんかドラマとかで出てくるシチュエーションだったり
- 2 M7 : ああ。
- 3 M9 : 4 のなんですか? =
- 4 F1 :                                 = 4 の 15 =
- 5 M9 :                                 = あ、15 =
- 6 M7 :                                 = 一番下
- 7 M8 : [あ::
- 8 M9 : [あ : :
- 9 M8 : おれマルしてないです [すいません。
- 10 M9 :                                 [おれもしてません、すいません。
- 11 M8 : 見て ああでも確かに

ここで、F4の1行目の発言でトピックになっている4.15の項目は、「取引先社員が宴席で、女性社員の身体に触るのを見てみぬふりをされる。」である。

図2で示したのは、F1の最初の発話における、F1とM7、M8、M9の身体的配置とそれぞれの視線である。F1の「4の15ってよく」という発話がなされると、M7、M8、M9は調査票に視線をおとしてその項目をさがす。ここで注目したいことは、F1が正当な問題の提起を提出しているような形で発言をし、M7、M8、M9らはその問題の提起をともに受け取るものとしての体勢をとっているということである。

さらにこの場面で、F1は、「4の15ってよく、よくなんかドラマとかで出てくるシチュエーションだったり」といって、4.15という質問項目にかんして、テレビドラマなどにもある状況であると描写している。2行目でM7は「ああ」と発話し了解する。3行目で、M9は

「4のなんですか?」という質問をし、F1は「4の15」(4行目)と答える。その答えに対してM8とM9は7行目8行目で「あ::」と同時に発話する。そして9行目でM8は「おれマルしてないです すいません」とあやまり、M9も10行目で、M8の発話と重ねる形で「おれもしてません、すみません」とあやまっている。そして11行目で、M8は「見て、ああでも確かに」と確認を行っている。

ここで重要なのは、F1の答えが、ただの答えではなく、「正当な答え」として会話参与者によって扱われているということである。さらにその答えが、男性であるM8、M9にとっては、今まで知らなかったことの新たな発見として扱われていることである。M8、M9は同時に「あ::」ということ、その発見をいま了解したことを同時に示している。さらにそのあとM8、M9は間違った答えをだしたのものとして、自ら「すみません」と答えることで、F1の答えが正当な答えであることを了解している。

これによって、知識の配分というレベルで、F1は単に知識を持つものではなく、正当な知識を持つものとして、会話参与者によって扱われていることがわかる。またそれによって、M8、M9は間違った答えを出したのものとして参与者自身によって扱われる。そしてそのような答えの正当性の根拠の一つは、性別カテゴリーである「男性・女性」に求めることができる。性別カテゴリーは、知識をそれぞれのカテゴリーに配分し、かつまたそれぞれのカテゴリーに属する成員がそれぞれの知識をもっているものという推論を可能にさせる。

もちろん、この場面が通常の会話ではなく、社会調査という制度的場面における会話であるということが、ここでの会話や相互行為と関連しているかもしれない。特に、大学生に対して教師が行ったセクシュアル・ハラスメントに関する調査研究という制約が、この場面を、セクシュアル・ハラスメントに関する知識についての正解を求めるテストという特徴を作り出したのかもしれない。

だが問題は、性別カテゴリー化にもとづく知識の配分や、性別カテゴリーに基づく推論に参与者が志向していることである。そうした参与者の志向を示すことによって、研究者は性別カテゴリーの使用のレリバンス(適切性)を、根拠を持って示すことができるのである。

## 5. 性別カテゴリーの一貫した使用

性別カテゴリーは、一度場面の中に現れると、その場面の参加者を一貫した形でカテゴリー化する。

断片1及び断片2の会話では、直接「男」あるいは「女」という性別カテゴリーは、会話参与者によっては用いられていない。次に、そうした性別カテゴリーが、より明示的に用いられている例を分析してみることにしたい。

断片3は、M1、M2、M3という男性3人の会話である(図3)。会話のセッティングは、

断片 1、断片 2 と同じである。

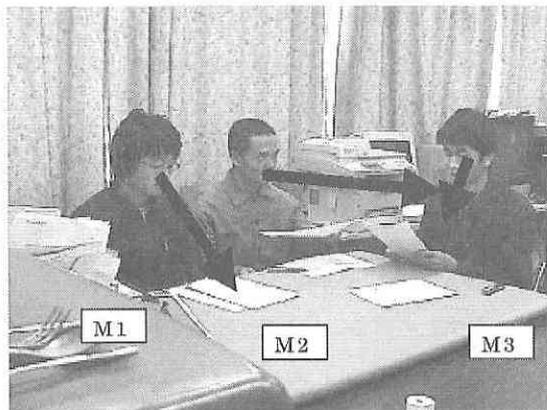


図 3

断片 3

- 1 M3: セクシャルハラスメントについて調査に::
- 2 M1: そうだねえ
- 3 M3: てかそう言われてもこれ、(いっと) [(お)]
- 4 M1: [男 3 人でね]
- 5 M2: うん
- 6 M1: もりあがる
- 7 M2: hhhh [h]
- 8 M1: [ていうか盛り上がらないよ]
- 9 M2: まあ盛り上がるっていう気持ちもないけど
- 10 M1: でも [盛り上がりたくないけど]
- 11 M3: [盛り上がるとかそういう問題じゃなくてその前にセクシャルハラスメントって女性の側からだろ]
- 12 M2: でもいま男性も考えなきゃいけないってことなんでしょ
- 13 M3: まあ

1 行目で M3 が「セクシャルハラスメントについて調査に::」といて、セクシュアル・ハラスメントを話題にあげると、M1 は「そうだねえ」と同意している。3 行目で、M3 が「てかそう言われてもこれ (いっと) (お)」というのと、4 行目で M1 は M3 の発話に重ねながら「男 3 人でね」と発話し、5 行目で M2 は「うん」と答えている。

この発話において、セクシュアル・ハラスメントというトピックにかんして、自分たちが議論するさいのためらいを M1 は「男 3 人でね」ということで示している。さらに、8 行目、

9行目、10行目で、M1とM2は、「ていうか盛り上がらないよ」「まあ盛り上がるっていう気持ちもないけど」「でも盛り上がりたくないけど」と答えている。こうした発言においては、会話参与者たちは、自分たちを「男3人」として「男性」としてカテゴリー化しており、さらに男性同士では盛り上がらないと述べている。

さらに、11行目でM3は「盛り上がるとかそういう問題じゃなくてその前にセクシャルハラスメントって女性の側からだろ」と発言する。それによって、自分たちを「男性」としてカテゴリー化すると同時に、「男3人」の参加者が、問題の当事者として正解を提出することが困難であることを示している。そしてさらに、セクシュアル・ハラスメントの問題が、女性の側からの根拠をもって正当とされる、「女性」という性別カテゴリーに付随する問題として示されている。

こうした、「男3人でね」「盛り上がらないよ」「セクシャルハラスメントって女性の側からだろ」という形で続く一連のシークエンスは、セクシュアル・ハラスメントの問題は、「女性」と「男性」という性別カテゴリーによって見方がことなるものであるという見解を示している。それらの発話において、セクシュアル・ハラスメントが「女性」「男性」という二つのカテゴリーにたいして対立する構造をもっていることが示され、同時に参与者は「男性」という形で、「男3人でね」以降、一貫してカテゴリー化される。

しかし、12行目でM2は「でも男性も考えなきゃいけないってことなんでしょ」と、「男性」「女性」の対立的な構造を和らげる提案をしている。すなわち、セクシュアル・ハラスメントという知識とそれに関連する問題は「女性」に限定されるわけではなく、「男性」にも共有されるものであると述べている。また、「男性」と「女性」という性別カテゴリーの根本的な対立ではなく、「考え方」の対立であると述べている。しかしその場合でも、あくまで会話参与者を「男性」とカテゴリー化した上で、「女性」だけでなく「男性」も考えなければならぬ問題であると述べているのである。

このシークエンスでは、セクシュアル・ハラスメントという話題が、「女性」という性別カテゴリーに付随するものとして、「男性」というカテゴリーとは関連しないものであるという見解がまず示される。さらに自分たちを「女性ではないもの=男性」とカテゴリー化した上で、セクシュアル・ハラスメントの問題が、自分たち以外の問題として、すなわち「男性ではないもの=女性」というカテゴリーに本質的に関連するものとして示される。それによって、参与者たちは、セクシュアル・ハラスメントの問題について議論することへのためらいを示す。そのあとで、M2は、「でもいま男性も考えなきゃいけないってことなんでしょ」という性別カテゴリーによる対立の緩和策をとっているが、あくまでその発言は自分たちを「男性」としてカテゴリー化したうえで、女性だけでなく「男性も考えなきゃいけない」という発言としてなされている。

このように、会話のシークエンスのなかで、ひとたび性別カテゴリーが使用されると、会

話参与者は「男性」、あるいは「女性ではないもの」としてシークエンス的に、かつその場面の参与者全体を、一貫的にカテゴリー化する。性別カテゴリーの対立を緩和する発言も、「男でも」「女でも」という形で、自らを性別カテゴリーによってカテゴリー化した上でなされているのである。

しかし同時に、会話参与者は、カテゴリーの一貫性を保ちながらも、同じ成員カテゴリーが含まれる成員カテゴリーの集合（成員カテゴリー化装置）を変換させている。

セクシュアル・ハラスメントという問題に関して、会話参与者は、「女性対男性」「男性対男性でないもの」「女性対女性でないもの」という潜在的に対立する構造を保った上で、成員カテゴリーの集合を「男性・女性」「男性・男性でないもの」「女性・女性でないもの」という形で変換させているのである。

## 6. 結論

本論では、いくつかの断片を分析することによって、会話において、性別カテゴリーが会話のシークエンスにおいてどのように用いられるかということを示した。さらに、会話のシークエンスにおける性別カテゴリーの使用とレリバンス（適切性）という問題をも提示し議論をおこなった。ここで、われわれは次のような結論を提示することができるだろう。

第一に、参加者が性別カテゴリーを言明していない場合でも、参与者の知識や推論や志向にもとづいて、それぞれの発言およびそれに続く継起的なシークエンスを、それぞれの性別カテゴリーに基づいた言明として分析することが可能であるということである。

第二に、参加者が性別カテゴリーにまつわる発話を行った場合、会話者自身が性別カテゴリーによってカテゴリー化される場合があるということである。また、一度そのようなカテゴリー化がなされると、参加者自身がシークエンスのなかで継起的にかつ一貫的にそのようなカテゴリー化を行うということを示すことができるということである。

ただし、第2節で示したように、性別カテゴリーは、Pn 適合的であり、カテゴリー要素が二つであるという特徴をもつ。そのことによって第4節で示したように、同じ「男」という一貫的なカテゴリー化がされた場合であっても、「女性対男性」「男性対男性でないもの」「女性対女性でないもの」「男でも女でも」という形で、カテゴリー集合を変えた形で、「男」というカテゴリーを使用することもできる。こうした性別カテゴリーの一貫性と、性別カテゴリー集合の変換を考えるとということも、性別カテゴリーを研究するうえで重要な指標になるであろう。また、カテゴリーを自分や他者に適応するときどのような実際的な問題があるかという視点から、性別カテゴリーの問題を考えることもできる（山崎、1994、山崎・山崎、1996）。

会話や相互行為の分析をおこなうときに、理論的な知見からデータを検討すること、また

データの分析から理論的な知見をえることは当然の目標である。しかし、われわれが会話や相互行為を分析しようとするときに、もっとも大切なことは、Gene Lerner が2004年に出版した“Conversation Analysis”のなかで、サックスが彼にしたアドバイスとして述べた「データに向き合う」ということである。データは必ずしも、研究者にとって容易なものではない。しかし、だからこそ、データにおける参加者のレリバンス（適切性）が何であるのかを、見つけなければならない。研究者は虚心坦懐にデータを観察しなければならないのである。データのなかの参加者つまり会話者の発話や身体の志向を観察することによって、そのシークエンスにおける性別カテゴリーのレリバンスを考察することが可能となるのである。

参考文献

- Goodwin, M. H. 1990. *He-Said-She-Said: Talk as Social Organization among Children*. Bloomington, IN: Indiana University Press.
- Lerner G. H. (ed.) 2004. *Conversation Analysis: Studies from the First Generation*. Amsterdam: John Benjamins.
- Maltz D. N. and Borker R. A. 1982. “A Cultural Approach to Male-Female Miscommunication.” In J. Gumpertz (ed.) *Language and Social Identity* 196-216. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sacks, H. 1972. “An Initial Investigation of the Usability of Conversational Data for Doing Sociology.” In D. Sudnow ed. *Studies in Social Interaction* 31-74.: New York Free Press.
- Sacks, H. 1995. *Lectures on Conversation*. Oxford: Blackwell.
- Sacks, H., E. Schegloff, and G. Jefferson 1974. “A Simplest Systems for the Organization of Turn-Taking for Conversation.” *Language* 30, 696-735.
- Schegloff, E. A. 1987. “Between Macro and Micro: Contexts and Other Connections.” In J. Alexander, et al. eds. *The Micromacro Link*. 207-234, Berkeley and Los Angeles: University of California Press. (『マイクロ・マクロ・リンクの社会理論』石井幸夫他訳, 1998:新泉社.)
- Spear, S. 2005. *Gender Talk: Feminism, Discourse and Conversation Analysis*. London: Routledge.
- Stokoe, E. H. 1998. “Talking about Gender: The Conversational Construction of Gender Categories in Academic Discourse.” *Discourse & Society* 9-2, 217-240.
- Tannen, D. 1990. *You Just Don't Understand: Women and Men in Conversation* New York: William Morrow (『わかりあえない理由』1992.田丸美寿々, 金子一雄訳:講談社.)
- 山崎敬一 (1994) 『美貌の陥穽—セクシュアリティの 에스ノメソドロジー』東京:ハーベスト社。
- 山崎敬一・山崎晶子 (1996) 「虚構としての男と女」『現代日本の差別構造』講座差別の社会学第2巻:東京弘文堂。
- Zimmerman, D.H. and C. West. 1975. “Sex Roles, Interruptions and Silences in Conversation.” In B. Thorne and N. Henley eds. *Language and Sex: Difference and Dominance*. 105-29. Rowley, Mass.: Newbury House.